大乗阿毘達磨集論（Abhidharmasamuccaya）並びにAbhidharmasamuccaya-bhāṣyaの和訳

——決択分、法品第二より——

舟橋尚哉

はじめに

無著造「大乗阿毘達磨集論」（Abhidharmasamuccaya）は、唯識思想と阿毘達磨思想との接点に立つ重要な論書である。しかしながら、従来、「阿毘達磨集論」の梵本は、Gokhale: Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, 1947. の梵文断片しかなく、Pradhan によって Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, Santiniketan 1950 が出版されたが、還元梵語の個所が多く（勿論、当時未刊の Bhāṣya の梵本を参照してはいるが）、資料的にはいま一つという感があったため、すでに早くから「阿毘達磨集論」と「唯識三十頌」との関係が指摘[1]されながら、その後、阿毘達磨集論の研究が遅々として進まなかったようである。

しかし最近、Nathmal Tatia: Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam, Patna 1976. が出版[2]されたため、この Bhāṣya の梵本を用いた阿毘達磨集論の研究[3]も盛んになってきた。阿毘達磨集論の和訳としては、吉元・玉井共訳「梵文阿毘達磨集論における煩悩の諸定義」（佐々木現順編「煩悩の研究」所収昭50年）があるが、ごく一部分であり、しかも心所の名称が大部分を占めている。

私もこのような難解な書に、完全な訳をつける自信は勿論ないが、阿毘達磨集論の研究の一助となればと思い、あ

えてここに和訳を発表することにした。不充分なところは御教示頂ければ幸甚である。幸い今回、和訳を試みようとする個所は、先[4]に発表した私の論文と重複する個所もあり、その後、輪読[5]においても一応の検討を行なったつもりである。しかし Gokhale 本が欠けている個所であるので、Abhidharmasamuccaya（集論）の和訳は、一応チベット訳より和訳し、Pradhan の還元梵語は参考にするだけにとどめた。（勿論、Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の訳は梵本よりの和訳である。）

＊　＊　＊

決択分、法品第二[6]

〔集論の和訳〕

一　十二分教

「法[7]決択（dharmaviniścaya）とは何かといえば、法[8]（dharma）とは、(1) sūtra（経）と、(2) geya（応頌）と、(3) vyākaraṇa（記別）と、(4) gāthā（諷頌）と、(5) udāna（自説）〔Tib, 264-2〕と、(6) nidāna（因縁）と、(7) avadāna（譬喩）と、(8) itivṛttaka（本事）と、(9) jātaka（本生）と、(10) vaipulya（方広）と、(11) adbhutadharma（希法）と、(12) upadeśa（論議）とである。

(1) sūtra（経）とは何かといえば、略[9]説の方法（sūcanākāreṇa）で、散文をもって〔世尊が〕説き給うたものである。如来は十種の勝利（daśa-anuśaṃsa）を見給うて、略[10]説の方法によって法を説く。〔経は〕(i) 設定しやすく、(ii) 説きやすく、(iii)〔聞[11]者もまた〕受持しやすく、(iv) 法[12]を恭敬するによって速かに〔菩提[13]の〕資糧を円満せしめ、(v) 速かに法性に通達し、(vi) 仏に対して正解浄信[14]（avetya-prasāda）を得、(vii)—(viii) 法と僧とに対して正解浄信を得、(ix) 最勝[15]なる見法楽住（parama-dṛṣṭa-dharma-sukhavihāra）に触れ、(x) 談論の決択（sāṃkathya-viniścaya）によって、智者達の心を和解させ、賢者[16]は賢者という数に趣く。

(2) geya（応頌）とは何かといえば、その同じき経において、中間（madhya）と後（anta）とにおいて、かの偈頌（gāthā）が誦せられたものである。また未了義経を了解せしめるから geya（応頌）である。

(3) vyākaraṇa（記別）とは何かといえば、ある場[17]所に声[18]聞が過去にあって、命終（kālagata）して生ずること〔の[19]差別〕が vyākaraṇa（記別）である。また了[20]義経も vyākaraṇa（記別）である。

(4) gāthā（諷頌）とは何かといえば、韻文[21]（padya）によって説かれる。それは二句、三句、四句、五句、六句

を有している。

(5) udāna（自説）とは何かといえば、何かを〔如来が〕[22]喜悦して語られたところのものである。

(6) nidāna（因縁）とは何かといえば、[23]ある人に関して説かれたものである。因縁を有し（sa-utpattika）、学処を〔Tib. 264-3〕制定するもの（śikṣāprajñaptika）が説かれたものである。

(7) avadāna（譬喩）とは何かといえば、譬喩をもって説かれたものである。

(8) itivṛttaka（本事）とは何かといえば、〔声聞達の〕[24]前世の行為と相応するものである。

(9) jātaka（本生）とは何かといえば、菩薩行と相応するものである。

(10) vaipulya（方広）とは何かといえば、菩薩蔵と相応するものである。方広といわれるのと同様に、広破（vaidalya）と無比（vaitulya）とも同じである。何故に方広（vaipulya）といわれるのかといえば、一切の衆生を利益することと、安楽との所依であり、広くして、広大なる、甚深なる仕方で法を説くからである。何故に広破（vaidalya）といわれるのかといえば、一切の障を破するからである。何故に無比（vaitulya）といわれるのかといえば、比べるものがないからである。

(11) adbhutadharma（希法）とは何かといえば、そこにおいて声聞と菩薩と諸仏との不思議なる希法が説かれるものである。

(12) upadeśa（論議）とは何かといえば、そこにおいて、[25]法相が不顚倒に説かれるものである。

経等のこれら〔十二分教〕[27]は三蔵に摂せられる。(1) sūtra（経）と、(2) geya（応頌）と、(3) vyākaraṇa（記別）と、(4) gāthā（諷頌）と、(5) udāna（自説）と、これらは声聞の経蔵である。(6) nidāna（因縁）と、〔[29]そして〕(7) avadāna（譬喩）と、(8) itivṛttaka（本事）と、(9) jātaka（本生）とを眷属として具する、それらは律蔵である。(10) vaipulya（方広）と、(11) adbhutadharma（希法）である、これらは菩薩の経蔵である。(12) upadeśa（論議）は両者（声聞と菩薩）の阿毘達磨蔵である。」

* * *

〔Bhāṣya の和訳〕

〔――線は集論（Samuccaya）の本文〔（ここではチベット訳）に出ているもの。〕〕

Ⅰ　十二分教

Ⅲ

（Tatia 本、p. 95）（法決択と名づくる集論（samuccaya）第三）

§112.「法決択[30]（dharmaviniścaya）に関して法とは十二分[31]教である。」

§113.「その中、sūtra（経）とは、[32]意図せられた義を略説の方法によって、散文をもって〔世尊が〕説き給うたものである。また何故に如来はその意図せられた義を詳しく説き給わないのかといえば、答えて曰く、如来は十種の勝利（daśa-anuśaṃsa）を見て、略説の方法によって法を説き給うのである。〔十種の勝利とは〕

(i) 設定しやすいとは、実に説者によって理解さるべき義を多種に設定して、略して困難なく設定するからである。

(ii) 説きやすいとは、少〔言〕によって大いなる、広大な義を理解せしめるからである。譬えば〔心を〕住せしめ（sthāpayati）、安住せしめ（saṃsthāpayati）といういい方で〔多くの内容を説く〕。

(iii) [33]聞者もまた受持しやすい。

(iv) 法を恭敬するによって速かに〔菩提の〕資糧を円満せしめるというのは、この法は心[34]〔慧〕によって理解されるものであると了解して、敬[35]意を生じた（jātāstha）人にとっては、この法を尊敬するによって、信等の資糧が円満するからである。

(v) 速かに法性に通達するとは、このように尊敬〔の心〕を加行した人にとっては、智慧が鋭くなるからである。

(vi)—(viii) 〔三〕宝に対して正解浄信を得るとは、教説がよく設定されたものを理解することによって、説者等に対する浄信が生ずるからである。

(ix) 最勝なる見法楽住に触れるとは、〔如[36]来の〕密意趣の義を大いなる精進をもって、思惟して獲[37]得した人は、すぐれた歓喜を証得するからである。

(x) 談論の決択によって(a)智者達の心を和解させるとは、甚深なる義を解釈するからである。それ故にこそ(b)賢者は賢者であるという数に趣く。彼の名声が遍く流布するという意である。この両者は後に総じて一つの勝利（anuśaṃsa）と見らるべきである。」

§114.「了義経は vyākaraṇa（記別）である。それ（了義経）によって開示して密意（abhisaṃdhi）を記別するからである。」

§115.「udāna（自説）、それは歓喜している人によって説かれたものである。譬えばこれらの諸法が現前に生起し

た時云々と」

§116.「nidāna（因縁）はある人（pudgala）[38]に関して説かれたものである（uddiśya bhāṣitaṃ）。[39]あるいは因縁を有し、学処を制定するものが説かれたものである。譬えばこの因縁において、このテーマ（prakaraṇa）において云々と」

§117.（Tatia 本、p. 96）avadāna（譬喩）は、譬喩を有して説かれたものである。それ（譬喩）によって義を明了にするから、明らかにする故に、という意である。」

§118.「vaipulya（方広）、vaidalya（広破）、vaitulya（無比）という、これらは大乗の異名である。これ（方広）は、この七種の大性（mahattva）と相応するから大乗といわれる。七種[40]の大性とは、

(i) 所縁の大性は、菩薩道の十万〔頌般若〕等の無量の経の教法を所縁とする故に。

(ii) 行（pratipatti）の大性は、すべての自利利他の〔行を〕行ずる故に。

(iii) 智の大性は、人法〔二〕無我を知る故に。

(iv) 精進の大性は、三大無数劫において多くの難行を行ずる故に。

(v) 方便善巧の大性は、生死と涅槃とに住しない故に。

(vi) 証得（prāpti）の大性は、〔十〕力と〔四〕無所畏と〔十八〕不共仏法等の、無量無数の功徳を証得する故に。

(vii) 業の大性は、生死〔輪廻〕のある限り、菩提等を示現するによって、仏[41]の事業（buddhakārya）を実行する故に、と。」

§119.「upadeśa（論議）は、そこにおいて不顚倒なる法相として、経等の義が説かれるものである。」

§120.「(i) nidāna（因縁）は、因縁を有し（sa-utpattika）、学処の制定するものを説いたものを摂するものは律蔵である。譬喩等は、その眷属であると知らるべきである。

(ii) adbhutadharma（希法）は、菩薩の経蔵に摂せられる。それら（希法）には、殊更に不可思議にして、広大なる勝れた威力と相応するからである。

(iii) upadeśa（論議）は声聞乗と大乗との両者における阿毘達磨蔵である。」

〔集論の和訳〕

* * *

二　三蔵の設定

「何[42]故に諸の如来〔Tib. 264-4〕によって〔三〕蔵が設定せられたかといえば、疑（vicikitsā）の随煩悩を対治せんがために経蔵（sūtrapiṭaka）を設定する。二辺と相応

する随煩悩を対治せんがために律蔵（vinayapiṭaka）を設定する。自らの見に執著する随煩悩を対治せんがために阿毘達磨蔵（abhidharmapiṭaka）を設定する。また三学を説かんがために経蔵を設定する。増上戒〔学〕と増上心学とを成就せんがために律蔵を設定する。増上慧学を成就せんがために阿毘達磨蔵を設定する。

また法[43]（dharma）と義（artha）とを説かんがために経蔵を設定する。法と義とを作証する（sākṣātkriyā）依所（padasthāna）のために律蔵を設定する。談論の決択することから法を受用するによって安楽に触れることに住せんがために阿毘達磨蔵を設定する。」

＊　＊　＊

〔Bhāṣya の和訳〕

二　三蔵の設定

§121 A（Tatia 本、p. 96, l. 17）「(i)　疑の随煩悩の対治として経蔵を設定する。所化の人々のすでに生じた、または未だ生じていない疑惑を断除することを主題として（adhikāreṇa）、sūtra（経）や geya（応頌）等を説くからである。[44]

(ii)　二辺と相応する随煩悩の対治として律蔵を設定する。〔財の〕蓄積の享楽等を遮するが故に。また百千の衣服〔等〕[45]を許可するが故に。なお二辺とは欲楽の辺と、自らの苦行の辺とである。

(iii)　自らの見に執著する随煩悩の対治として阿毘達磨〔蔵〕を設定する。その（阿毘達磨蔵）中で、詳しく法の相が立てられるからである。」

§121 B.（Tatia 本、p. 97）「(i)　また経蔵に依って所化たちは三学[46]に通暁する。その（経蔵）中に、彼（三学）が詳しく説明されているからである。

(ii)　律〔蔵〕によって、増上戒[47]〔学〕、増上心学を成就する。その（律蔵）中、別解脱律儀（prātimokṣa-saṃvara）の学道を説くことを依止とし、戒を浄める故に戒の浄化を為して無悔（avipratisāra）等の次第によって心を集中させるからである。

(iii)　阿毘達磨〔蔵〕に依って、増上慧学[48]を成就する。その（阿毘達磨蔵）の中で、詳しく法簡択の方便を説く故に。それ故に三蔵を設定する。」

§121 C「(i)　また経蔵に依って文章（grantha）と義[49]（artha）が解了される。

(ii)　律〔蔵〕に依って、この二つ（文章と義）を作証する。律〔蔵〕は学の行（śikṣāpratipatti）によって明らかにされるからである。それ故に所依（āśraya）の義という点

で、[50]法と義とを作証する依所（padasthāna）であるといわれる。

(iii) 阿毘達磨〔蔵〕に依って、互いに談論[51]の決択を為すことによって法を受用するによって〔楽に〕触れることに住する。この（阿毘達磨蔵）中に、多種の諸法の自と〔共[52]と〕の相等の法性が明らかにされるからである。」

§122.「声聞乗を代表する尊者阿難によって受持せられた所の、この三蔵は、八万四千の法蘊を有するものである。では法蘊の量はどれほどであるか。一法蘊は十百の数を有する、〔すなわち〕千の数を有する、という意である。もしかくの如くであるならば、千の数を有すると、このようにどうして説かないのか。一蘊は〔それぞれ〕千を有することを設定するとき、〔その〕目的を知らしめんがためである。なぜなら、一を初めとして、〔位を〕増やして、十の数、百の数、千等の数〔となるの〕である。この十百の数は根本（upaniṣad）と見らるべきである。譬えば十百は千であり、千の百は十万であり、十万の百は一千万（koṭi 倶胝）と、このようにこの十と百との二つの数の、いずれか一つが必ず、すべての〔桁が上の〕後の数において根本（依止）となる。それ故に、これら二つ（十と百）を合わせて、一法蘊は十百（の数）を有すると設定されるのである。そしてこの計算によって八万四千の法蘊は、八千四百万（八倶胝四十洛叉）となる。」

〔集論の和訳〕

* * *

三　心心所法

「これらの〔三蔵所摂の〕[53]法は、何の行境（gocara）であるかといえば、聞所成と思所成と修所成との心と心所法[55]の行境である。〔経中に〕[56]心と心所の諸法は(1)有所縁と、(2)有行相と、(3)有依と、(4)有相応といわれる。〔三蔵所摂の〕法の中において、それらの、

(1) 所縁（ālambana）とは何かといえば、sūtra（経）等である。

(2) 行相（ākāra）とは何かといえば、蘊等と相応する義である。

(3) 依止（āśraya）とは何かといえば、他人による表示（vijñapti）と憶念（smṛti）と習気（vāsanā）とである。〔Tib. 264-5〕

(4) 相応するもの（saṃprayoga）とは何かといえば、あるものがあるものの[57]助伴（sahāya）となる仕方で、行相によって所縁を了解する。」

〔Bhāṣya の和訳〕　　＊　　＊　　＊

三　心心所法

§ 123.（Tatia 本、p. 97, l. 23）[58]「この三蔵所摂のかの法[59]は、何の行境であるかといえば、聞所成等の心心所の行境である。〔行境とは〕所縁であるという意である。この傍論（＝附随的議論）（prasaṅga）として有所縁[60]（sālaṃbana）等を相とする、心心所の法（dharma）に関して所縁（ālaṃbana）等が設定される。

その中、[61]（i）法（dharma）における、それら（心心所）の所縁とは何か。sūtra（経）等である。名〔身〕、（Tatia 本、p. 98）句〔身〕、文身に摂せられた sūtra（経）等の教え（deśanā）であるという意である。

（ii）行相（ākāra）とは、蘊等の義の種類（prakāra）に関しての、その教説である。それら心心所は、それ（教説）を行相とすると知らるべきである。

（iii）依止（āśraya）とは他人よりの表示[62]（vijñapti）と憶念と習気とである。その中、教説の時に、他人よりの表示を依止とし、これは他の声より語られると、それから後の時に憶念を依止とし、聞かれたままに念をもって数習するからである。それから後の時に、習気を依止とし、その念なくしても、後に数習することの習気の力によって〔教説が〕顕現するからである、と。

（iv）相応（saṃprayoga）は心心所が互いに助伴（sahāya）となって、経等の所縁において蘊等と相応する義の行相をもって了解する。」　（未完）

註

① Pradhan: Abhidharma-samuccaya, 1950. Introduction p. 18 参照。
高崎正芳氏「無著・阿毘達磨集論について」（大谷学報第36巻第2号、昭31年）三八頁以下参照。
なお、高崎正芳氏には雑集論の最初の部分に相当する vyākhyā のチベット訳よりの和訳を含む論文「雑集論に於ける蔵・漢両所伝」（禅学研究第54号昭39年）もある。

② この N. Tatia の Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の出版に協力された篠田正成氏には、「阿毘達磨雑集論に於ける六波羅蜜多思想――仏教の社会倫理――」（日本仏教学会年報第35号昭44年度）、「阿毘達磨雑集論における生死」（日本仏教学会年報第46号、昭55年度）などの論文がある。

③ 拙稿「十二分教と三蔵・二蔵との相摂関係について――『大乗荘厳経論』『大乗阿毘達磨集論』『瑜伽論』を中心として――」（大谷学報第57巻第3号昭52年）参照。
上杉宣明氏「阿毘達磨集論の有色・無色説について」（印仏

研究第26巻第1号、昭52年）参照。
吉元信行氏「阿毘達磨集論における滅諦の諸定義」（印仏研究第26巻第2号、昭53年）参照。
袴谷憲昭氏「アーラヤ識存在の八論証に関する諸文献」（駒沢大学仏教学部研究紀要、第36号昭53年）参照。
高崎正芳氏「大乗阿毘達磨雑集論の一、二の問題点について」（印仏研究第27巻第1号、昭53年）参照。
吉元信行氏「阿毘達磨集論における蘊処界建立の特質」（印仏研究第27巻第1号、昭53年）などの論文がある。
なお、Abhidharmasamuccaya の dharmaviniścaya（法決択）を扱った論文として袴谷憲昭氏「Asaṅga の聖典観——Abhidharmasamuccaya の dharmaviniścaya 章について——」（曹洞宗研究員研究生研究紀要第四号、昭47年）がある。

④　拙稿「十二分教と三蔵・二蔵との相摂関係について——「大乗荘厳経論」「大乗阿毘達磨集論」「瑜伽論」を中心として——」（大谷学報第57巻第3号）参照。

⑤　私の研究室で行なっている輪読である。（特に大谷大学特別研修員松田和信氏から示唆を多く得た。ここに感謝の意を表します。）

⑥　「大乗阿毘達磨集論」巻第六（大正三一、六八六a）。漢訳並びに Pradhan 本では「決択分、法品第二」であるが、Bhāṣya では「法決択と名づくる集論第三」（Tatia本、p. 95）とあり、「集論」のチベット訳でも「集論第三」に相当している。

⑦　影印北京版112巻264—1—8参照。Pradhan 本、p. 78, l. 2 参照。

⑧　チベット訳より訳した。漢訳は「法者謂十二分聖教」（大正三一、六八六a）である。Rahula の仏訳 p. 131, l. 4.〈Walpola Rahula : Le Compendium de la Super-Doctrine (Philosophie) (Abhidharmasamuccaya) D'Asaṅga〉は Pradhan の還元梵語によっていると思われる。（例えば、noble は sk. ārya の訳と思われるが、ārya（聖なる）は漢訳と Pradhan 本にしかなく、チベット訳は勿論のこと、Tatia 本にもない。）

⑨　前田恵学博士「原始仏教聖典の成立史研究」二二七頁以下、特に二五六頁参照。漢訳にも「略説」とある。

⑩　北京版は smos paḥi tshul gyis（264—2—2）であるが、デルゲ版は mdor smos paḥi tshul gyis（101a²）となっている。

⑪　チベット訳にはないが、Pradhan 本には śrotāpi とあるが、おそらく Tatia 本の原本によって挿入したのであろう。

⑫　仏訳（p. 131）では、これも(iii)の中で説いている。従って、仏訳では以後一つずつ番号がずれている。

⑬　漢訳と Pradhan 本には菩提（bodhi）が入っている。

⑭　avetyaprasāda（ses nas dad pa）は Pradhan 本（p. 78, l. 8）も、その Bhāṣya の Tatia 本（p. 95, l. 13）も、avetya prasāda（〜を知って浄信する）となっていて離れているが、

仏訳では avetyaprasāda (p. 131, *l.* 17) となっている。倶舎論 (sk. p. 387, *l.* 9) には、

avetyaprasādā iti ko'rthaḥ |
yathābhūtasatyānyavabudhya saṃpratyayo
'vetyaprasādaḥ |

とあるので、avetyaprasāda（正解浄信）という一つの語と考えた方がよいであろう。

⑮ チベット訳（北京版、デルゲ版）では「見法楽住の最勝」とある。

⑯ 仏訳 (p. 131, *l.* 21) では、これを(x)番目として数えている。従って、十種勝利の数え方は Tatia 本と、仏訳では少し異なる。

⑰ Shukla : Śrāvakabhūmi p. 137, *l.* 5 参照。

yasmiṃ chrāvakebhyo 'bhyatītakālagato〔tau ?〕
upapattau vyākriyate |

⑱ 仏訳 (p. 131, *l.* 28) では、nobles disciples (āryaśrāvaka) とあるが、これは Pradhan の還元梵語と漢訳とによっているのであって、チベット訳には śrāvaka のみである。

⑲ Pradhan 本、並びに漢訳によって差別 (prabheda) を補った。

⑳ 北京版 ñes paḥi don gyis mdo sde はデルゲ版では gyi (101a^6) とあり、北京版安慧釈でも gyi (197-5-2) となっている。

㉑ チベット訳 tshigs su sbyar nas (padya) によって訳した。Pradhan 本は pāda である。

㉒ 仏訳 (p. 132, *l.* 7) では、Tathāgata が入っているが、これも Pradhan 本と漢訳とによったものと思う。

㉓ 仏訳 (p. 132, *l.* 10) には quand on le questionne とあるが、これは Pradhan の還元梵語の pṛṣṭena yad bhāṣitam (p. 78, *l.* 19) を訳したものと思われる。しかし集論のチベット訳、並びに Tatia 本では kiṃ cid eva pudgalam uddiśya (p. 95, *l.* 23) となっているので、私はこれによって訳した。

㉔ 仏訳 (p. 132, *l.* 16) には nobles disciples とあるが、これも Pradhan の還元梵語 āryaśrāvaka と漢訳とによっていると思われる。

㉕ 前田恵学博士「原始仏教聖典の成立史研究」三五三頁参照。

㉖ 仏訳 (p. 133, *l.* 2) には profonde et subtile とあるが、これは Pradhan の還元梵語 gambhīragūḍha (p. 79, *l.* 8) と漢訳とによったものと思う。

㉗ 仏訳 (p. 133, *l.* 4) では douze membres (aṅga) が入っているが、これも Pradhan の還元梵語と漢訳とによっていると思われる。

㉘ チベット訳では北京版 sde gnod gsum du ḥgyur te であるが、デルゲ版によって、sde snod gsum du ḥgyur te と訂正。そして後半を漢訳と Pradhan 本とによって「摂」(saṃgṛhīta) と訳した。

㉙ nidāna (因縁) の後に、[そして]を挿入したのは、Bhāṣya に「nidāna (因縁) は因縁を有し (sa-utpattika)、学処を制

定するものを説いたものを摂するものは律蔵である。譬喩等はその眷属であると知らるべきである」(sk. p. 96, *l.* 13) とあることによった。

㉚ Tatia ; Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam p. 95, *l.* 3 参照。

㉛ チベット訳を参照して直訳すれば、「教え（言葉）に関する十二の支分である」となるが、瑜伽論声聞地では dvādaśāṅgavacogata (sk. p. 135, *l.* 10) のチベット訳は gsuṅ rab yan lag bcu gñis po (影印北京版110巻62—3—7) となっていて、「十二分教」と訳している。

㉜ Tatia 本では abhipretārtha (sk. p. 95, *l.* 5) をゴチックにしているが、Pradhan 本は還元梵語であるので、集論の本文のチベット訳にない、この語をゴチックにする必要はないと思う。

㉝ Tatia 本では śrotā'pi (sk. p. 95, *l.* 10) をゴチックにしているが、註㉜と同じ理由により、集論の本文のチベット訳にない、この語をゴチックにする必要はない。

㉞ bhāvagamya : to be conceived by the mind (モニヨル) によって訳したが、漢訳「深慧所証」(大正三一、七四三b) を参照して「慧」を補った。しかし、チベット訳では bsgoms pa 修習（デルゲ版も同じ）とあり、また安慧釈 (197-4-3) のチベット訳も同じであるので、チベット訳からは「修習するによって」と訳した方がよいことになる。

㉟ jātāstha : taking into consideration (モニヨル) と、チベット訳 gus pa bskyed pa と漢訳「敬愛」(大正七四三b) とを参照して訳した。

㊱ 漢訳によって補った。

㊲ √labh+ta+vat（過去能動分詞）。

㊳ Tatia 本、p. 95, *l.* 23 ではゴチックになっていないが、集論の本文のチベット訳（影印北京版 264-2-8）には出ているから、ゴチックの方がよいと思う。

㊴ Tatia 本の vā はゴチックになっていないが、チベット訳 daṅ (Pradhan 本、vā) によって、ゴチックの方がよいと思う。（なお篠田ノートでは vā はゴチックである。）

㊵ S. Yamaguchi : Madhyāntavibhāgaṭīkā p. 200, *l.* 20 参照。
山口博士「中辺分別論釈疏」三二〇頁参照。
拙稿「十二分教と三蔵・二蔵との相摂関係について——「大乗荘厳経論」「大乗阿毘達磨集論」「瑜伽論」を中心として——」（大谷学報第五十七巻第三号）三〇頁参照。

㊶ 漢訳「諸仏事」（大正三一、七四四上）参照。

㊷ 影印北京版112巻264—3—8参照。

㊸ チベット訳によって訳したが、仏訳(p. 134, *l.* 3)は Pradhan 本の還元梵語と漢訳とを参照しての訳のように思われる。しかし Tatia 本 (p. 97, *l.* 7) の granthārtha (Tib. 118-4-7. tshig daṅ don) を参照して、一応先のように訳した。

㊹ anutpanna は Tatia 本 p. 96 註(5)の指摘のように、チベット訳及び漢訳にはない。

㊺ チベット訳と漢訳とによって補った。

㊻ Tatia 本、p. 97, *l.* 1 ではゴチックになっていないが、集論の本文のチベット訳（264-4-2）及び Pradhan 本、p. 79, *l.* 20 にもこの語は出ているから、ゴチックの方がよい。

㊼ この語も註㊻と同様の理由により、ゴチックにした方がよい。（チベット訳 264-4-3、Pradhan 本、p. 79, *l.* 21 に出ている。）

㊽ この語も註㊻と同様の理由により、ゴチックにした方がよい。（チベット訳 264-4-3、Pradhan 本、p. 79, *l.* 22 に出ている。）

㊾ この語も註㊻と同様の理由により、ゴチックにした方がよいと思う。（但し、チベット訳では chos daṅ don（法と義）である。）

㊿ この語も註㊻と同様の理由により、ゴチックにした方がよい。（チベット訳 264-4-4、Pradhan 本、p. 80, *l.* 1 に出ている。）

(51) この語も註㊻と同様の理由により、ゴチックにした方がよい。（チベット訳 264-4-5、Pradhan 本、p. 80, *l.* 2 に出ている。）

(52) チベット訳（118-5-1）及び漢訳「自相共相」（大正七四四 b）によって補った。

(53) 影印北京版 112 巻 264—4—5 参照。

(54) チベット訳にはないが、Pradhan 本、（p. 80, *l.* 4）仏訳（p. 134, *l.* 9）漢訳（大正六八六 c）によって補った。

(55) チベット訳（264-4-6）では北京版、デルゲ版ともに並列的に並べてあるだけであるが、Bhāṣya の sk. 並びに Pradhan の還元梵語を参照して訳した。

(56) チベット訳にはないが、Pradhan 本（p. 80, *l.* 5）、仏訳（p. 134, *l.* 13）漢訳（大正六八六 c）によって補った。なお、仏訳（p. 134 脚註(1)）には original の中にこれらの引用が見出されないとある。しかし倶舎論には次のような類似した記述がある。

cittacaitasāḥ |
sāśrayālambanākārāḥ saṃprayuktāśca（34 偈 b-c-d）

（Pradhan: Abhidharma-kośa-bhāṣya p. 62, *l.* 3）

桜部博士「倶舎論の研究」（界、根品）三〇〇頁参照。

(57) 北京版では grogs cig であるが、デルゲ版では grogs gcig となっている。

(58) eṣa piṭakatrayasaṃgṛhīto（Tatia 本 p. 97, *l.* 23）、は集論の本文のチベット訳（北京版 264—4—5、デルゲ版 102a[3]）にはない。Pradhan（p. 80, *l.* 4）の還元梵語は Bhāṣya の sk. と漢訳とによって補ったと思われるので、Tatia 本ではゴチックになっているが、ゴチックにする必要はないと思う。

(59) sa……dharmaḥ（Tatia 本、p. 97, *l.* 23）であるので、「かの法」と訳したが、チベット訳は chos ḥdi dag であるので、「これらの法」と訳した方がよいのかもしれない。

(60) Tatia 本（p. 97, *l.* 25）ではゴチックになっていないが、集論のチベット訳の本文には出ており、Pradhan 本にもあるから、ゴチックにした方がよいと思う。

㉑ Tatia 本 (p. 97, *l.* 26) では tatra はゴチックになっているが，集論のチベット訳の本文並びに Pradhan 本にもこの語は見あたらないので，おそらくゴチックは誤植であろう。

㉒ paravijñapti は paravijñaptiḥ の誤植であろう。

（昭和五十七年六月脱稿）

（本学助教授　仏教学）

Tatia 本の訂正

〔一，十二分教〕

p. 95, *l.* 3　dharmaviniścaye ⟶ dharmaviniścay までゴチック

p. 95, *l.* 3　dharmo ⟶ ゴチック

p. 95, *l.* 5　abhipretārtha ⟶ ゴチヤメ

p. 95, *l.* 5　kiṃ punar ⟶ ゴチヤメ

p. 95, *l.* 10　śrotā 'pi ⟶ ゴチヤメ

p. 95, *l.* 13　avetya prasādaṃ ⟶ avetyaprasādaṃ

p. 95, *l.* 23　uddiśya bhāṣitaṃ ⟶ ゴチック

p. 95, *l.* 24　vā ⟶ ゴチック

〔二，三蔵の設定〕

p. 97, *l.* 1　śikṣātraye ⟶ śikṣātray までゴチック

p. 97, *l.* 2　adhiśīlamadhicittaṃ śikṣāṃ ⟶ ゴチック

p. 97, *l.* 4　abhidharma ⟶ abhidharmaṃ

p. 97, *l.* 5　adhiprajñaṃ śikṣāṃ ⟶ ゴチック

p. 97, *l.* 7　artha ⟶ ゴチック

p. 97, *l.* 9　dharmārthayoḥ sākṣātkriyāyāḥ ⟶ ゴチック

p. 97, *l.* 10　sāṃkathyaviniścayakṛtena dharmasaṃbhogena sparśavihāro ⟶ ゴチック（または kṛtena だけを除いてゴチックにする。）

〔三，心心所法〕

p. 97, *l.* 23　piṭakatrayasaṃgṛhīto ⟶ ゴチヤメ

p. 97, *l.* 25　sālaṃbana ⟶ ゴチック

p. 97, *l.* 26　tatra ⟶ ゴチヤメ

p. 98, *l.* 3　paravijñapti ⟶ paravijñaptiḥ

（以上の訂正は，私の思いつくままに書き出したものであるが，この他にも見落したものがあるかもしれず，また私が Pradhan の還元梵語よりも，チベット訳を重視するあまり，Tatia 本の校訂者の方針と異なっている場合もあるかもしれないことをお断りしておく。）